



Title	探偵小説から推理小説へ : 辻真先〈昭和ミステリシリーズ〉における戦争
Author(s)	押野, 武志
Citation	層 : 映像と表現, 15, 212-226
Issue Date	2023-03-22
DOI	https://doi.org/10.14943/106294
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88616
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_11_p212-226.pdf



探偵小説から推理小説へ

——辻真先〈昭和ミステリシリーズ〉における戦争

押野 武志

はじめに——辻作品における戦争のテーマ

一九三二年生まれの辻真先のミステリ作家としてのキャリアは長い。デビュー作は、一九六三年に『寶石』に掲載された短編「生意気な鏡の物語」（桂真佐喜名義）で、同年の「新人二十五人集」に選ばれる。「犯人が読者」というアイディアの『仮題・中学殺人事件』（一九七二年）で第一作目の長編ミステリを発表する。『アリスの国の殺人』（一九八一年）で、日本推理作家協会賞を受賞。デビュー作以来、特殊設定、作中作を複雑に組み合わせた叙述トリックなどを駆使したメタフィクション的なミステリが多い¹⁾。

中学生にはじまって所帯をもったスーパー・ポテトシリーズ（『合本・青春殺人事件』一九九〇年）『戯作・誕生殺人事件』（二〇一三年）、ユーカリおばさんシリーズ（『旅は道づれ死体づれ』一九八四年）『超特急燕号誘拐事件』（二〇〇一年）、トラベルライター瓜生慎と財閥令嬢のカップル探偵シリーズ（『死体が私を追いかける』一九七九年）『日本・マラソン列車殺人号』（二〇一一年）、赤川次郎の三毛猫ホームズシリーズを踏まえた迷犬ルパンシリーズ（『迷犬ルパンの名推理』一九八三年）『迷犬ルパンと里見八犬伝』（一九九六年）など、シリーズものも数多く手がけている。そして、それぞれの作品の世界観を繋げ、別シリーズの登場人物が、ゲストとして描かれている

ものも多い。辻真先のアナグラムである牧薩次は、スーパー・ボテトシリーズの探偵役であると同時にいくつかの作中作の「作者」でもある。その牧薩次を実作者名にした作品に、『完全恋愛』（二〇〇八年）がある。作者のもう一つのペンネーム・桂真佐喜で、自身の本の巻末解説を行うこともある。

そうした多数のシリーズのうち、昭和を舞台に那珂一兵が探偵役として登場する、昭和ミステリシリーズ『深夜の博覧会昭和12年の探偵小説』（二〇一八年、東京創元社）、『たかが殺人じゃないか 昭和24年の推理小説』（二〇二〇年、東京創元社）、『馬鹿みたいな話！ 昭和36年のミステリ』（二〇二二年、東京創元社）を取り上げて論じたい。とりわけ、作者の戦争体験が色濃く反映されている、最初の二作品を中心に分析する。

辻にとって戦争は、創作活動における主要なテーマのひとつであった。ミステリ作家デビュー前は、『鉄腕アトム』、『サザエさん』、『デビルマン』など、アニメを中心とした脚本家として活躍していたわけだが、そこで既に戦争のテーマを扱っていた。

石ノ森章太郎原作の『サイボーグ009』のテレビアニメ版一六話「太平洋の亡霊」（一九六八年七月一九日、NET系列放送）は、原作にはない辻のオリジナル脚本が元になっている。ハワイを訪れていたサイボーグ009たちは、突如として、ゼ

ロ戦、月光、雷電、桜花、回天といった旧日本軍の兵器が幽霊戦闘機や幽霊軍艦となつて出現し、米軍戦闘機や戦艦を次々と襲撃する事態に遭遇する。さらには大戦艦（大和）、そしてビキニ環礁で原爆実験の標的とされて沈んだ連合艦隊旗艦長門が復活する。原子爆弾を落とされてもビクともせず放射能をまき散らしながら長門は、アメリカ西海岸へ向かつていく。

西海岸がパニックに陥る中、009たちは、今になってなぜ幽霊戦闘機・戦艦が出現したのか、その真相を追ううち、超心理学の権威・タイラ博士の存在に行き当たる。太平洋戦争の折特攻で一人息子のユータローを亡くしていた彼は、人間の脳が持つ潜在能力を引き出し増幅させる機械を作り上げ、その思念の力で日本海軍を蘇らせアメリカ軍を襲ったのであった。だが、ユータローの霊が現れ、論された博士は改心して復讐を断念する。最後に憲法九条の条文をスクロールで見せるなど、あの悲惨な戦争に何も学ぼうとせず、相変わらず戦争や核実験に明け暮れる人類への怒りが込められていた。大人の鑑賞には堪えないとされ、アニメがまだ「漫画映画」と呼ばれた時代だから可能だった表現だった。

辻は、文学的な世代論でいえば、一九三〇年代初めから半ばにかけて生まれた「内向の世代」や、開高健、石原慎太郎、江藤淳、大江健三郎、倉橋由美子らと重なる。ジャンルも異なり、

彼らの文学的な潮流とは直接には重ならないが、濃淡の差はあれ、戦中派や戦後派とも異なるこの世代の戦争体験が、後の文学活動に影響を与えることになる。

『深夜の博覧会 昭和12年の探偵小説』の時代背景と江戸川乱歩へのオマージュ

昭和一二（一九三七）年の銀座、似顔絵描きの少年・那珂一兵は、帝国新報の女性記者・瑠璃子から依頼を受ける。それは、名古屋汎太平洋平和博覧会の記事の挿絵を描くというものだった。瑠璃子と共に名古屋に向かった一兵は、趣味人の伯爵・宗像昌清がつくった奇矯な館「慈王羅馬館」を訪れる。そんな中、宗像の盟友で満州の大富豪である崔の愛人・杏蓮の切斷された両足が銀座で発見されるという事件が発生する。同時に被害者の妹・滯も監禁される。滯は一兵がほのかに想いを寄せる相手でもある。名古屋にいたはずの杏蓮の両足がなぜ東京で発見されたのか、杏蓮の胴体と頭はどこにいったのか、東京と名古屋にまたがる事件に少年探偵・一兵が挑む『探偵小説』であり、探偵小説批判を内在化した『反探偵小説』でもある。

副題が示すように、日中戦争前夜の日本を舞台にしているからという理由で、当時の呼び方が用いられているというだけで

はない。後述するように、本シリーズにおいては、〈探偵小説〉と〈推理小説〉は、異なる概念、ねじれた関係として差異化されている。

昭和一二年に開催された名古屋汎太平洋平和博覧会とは、同年三月一五日から五月三一日まで、名古屋市主催のもと開催された博覧会である。二九の国と地域のパビリオンから成る戦前の日本最大規模の国際博覧会として、四八〇万人もの客を集めた²。この博覧会は、東京では知られていなかったが、あるいはそれゆえに「あの時代に『平和』を名乗るだけでも特筆したかった」³と辻は述べている。

杏蓮が両足を切斷され、片方の足は犬がくわえて銀座の街を走り、もう一方の足はある怪しげな場所で料理に混入されるというショッキングな事件は、作中でも「エログロの時代」といわれているような時代にふさわしいものであった。館の主の過去や交友関係なども、昭和一二という時代を反映している。満州への移民政策も語られれば、甘粕正彦も登場し、当時の不穏な空気をも描き出している。

さらに、宗像伯爵が博覧会会場の隣に建てた慈王羅馬館も、悪趣味のさまざまな仕掛けや「エログロ」を詰め込んだ建物である。江戸川乱歩の『パノラマ島綺譚』（『新青年』一九二六年一〇月〜一九二七年四月）を意識したものであることは、間違

ないだろう。

『パノラマ島綺譚』は、売れない作家の人見廣介が、自分に瓜二つの資産家が急死したのをさいわい、彼になりすまして、その資産のすべてを人工楽園づくりに賭けるという物語である。未亡人がこの二セの夫の不気味な計画に感づきつつも人工楽園島をめぐるのだが、犯人に殺されてしまう。犯人はコンクリートの柱に死体を隠すも、探偵役の小説家によって犯行が暴露され、自らは花火と共に爆死して、血と肉の雨をパノラマ島に降らす。

か様にして、人見廣介の五体は、花火と共に、粉微塵にくだけ、彼の創造したパノラマ国の、各々の景色の隅々までも、血液と肉塊の雨となって、降りそそいだのでありました⁴。

それに対して、本作の首謀者である宗像は、相思相愛の杏蓮と心中して二人の身体をマイナス二〇〇度の液体空気にさらして衝撃を加えて、氷の霧となって空中に飛び散らす。このように、犯人が自らの身体を粉々に破碎し、空中にばらまくという最期は共通しており、乱歩的な変格探偵小説的な幻想趣味も溢れている。

ちなみに、辻の『焼跡の二十面相』（二〇一九年）は、江戸川乱歩の少年探偵団シリーズの名探偵不在という空白を埋めるものとして描かれる。敗戦間もない一面焼け野原の東京で、軍の委嘱を受けた暗号の仕事で日本を離れたまま帰らぬ明智の留守を預かる小林少年が活躍する。宿敵であるはずの怪人二十面相と共闘し、戦争中は軍や政治家に繋がってうまい汁をすすり、戦後は占領軍に取り入ろうとする軍需産業の首領らを討つ物語である。

密室殺人の不可能性／自白中心主義批判

軍国少年である一兵少年が、事件を通して「五族協和」「内鮮一体」といった当時のスローガンの裏にある実態と空虚さを知っていく過程も、事件の解決後に登場人物たちそれぞれがたどる運命も、時代を反映している。一兵は、満州建国が白人の侵略から逃れ、亜細亜の平和を体現する王道楽土だと信じている。五族協和のために、満州国が建国されたと疑わない。また、溥は郷里の婚約者・修市と共に、満州への移住を希望しており、そこに行けばより豊かになれると信じ、もともとそこに住んでいた農民たちのことに思いを馳せることができない。

しかし、宗像の助手・別宮操は、溥の恋人をわざと骨折させ

て満州移民を断念させる。また、事件の真相は、肺病で余命幾ばくもない崔の愛人・杏蓮が、関東軍の寺中少将（妹の濡を狙っていた）の野望を打ち砕くため、切断した足を彼らの密会所・遊興所となつてゐる『篠竹』に届けて、人肉パーティーの噂を流すためであつた。

一方、崔の正妻・潭芳夫人は、杏蓮の四肢を切断して復讐したいという欲望があつた。纏足で車椅子の潭芳夫人と夫人の護衛役の久遠チヨクト（実は愛人関係）の二人は、階数誤認トリック（隠れエレベーターを利用して三階だと思つたら六階だつた）により、墜落死する。

同様に、濡に、自分の居場所を誤認させるというのがメイントリックで、当時の科学的捜査の不備を利用することで、不可能犯罪の選択肢が増えることになる。

本格ミステリのサブジャンルとして、「クローズド・サークル」がある。エラリー・クイーン『シヤム双子の謎』（一九三三年）、アガサ・クリステイ『そして誰もいなくなつた』（一九三九年）のように、自然災害や絶海の孤島など、何らかの理由で外部との行き来や連絡が不可能である閉鎖環境を舞台にしたミステリのことである。容疑者が限定される中で、警察による科学捜査も行われず、スリルとサスペンスを盛り上げる。戦時下の日本という空間が、まさにそのような「クローズド・サー

クル」と化してゐたのである。ただし、ミステリにおいては、警察が排除される代わりに、名探偵が活躍することになるのだが、戦時下の日本には、無能な警察はいたが、犯罪者を追及する名探偵は不在であつた。

そうした戦時下の言説空間を批評的に抉り出した場面が、本作にある。一兵の推理に対して、崔の秘書・看護師の金白泳は、こう反論する。

「あなたの探偵ぶりを感心して見ていたけど、証拠なんてなかつたのね。みんな当推量だつたの、そう」

「でも可能性は高いと思つています」

「だからといって、その麻酔に詳しい女が私だなんて」

（中略）

仁科がまたズイと立ち上がつて、髯をこすつた。

「証拠がなくても、お前さんの考えは大いに参考になつた」

対抗するように金も立ち上がった。ほっそりした肢体だが、それまでの印象より遙かに強い存在感を溢れさせてゐる。

「刑事さんのいう通りです。証拠がないのに日本人は、大勢の朝鮮人を殺したのね」

ギクリとして仁科は彼女を見た。

「私の父は、関東大震災で日本の自警団に殺されました。井戸に毒を入れた証拠なんてあるはずがないのに」⁵

一九二三年九月一日の関東大震災直後に朝鮮人の暴徒化が報じられ、そのデマを信じた青年団・自警団らによって朝鮮人虐殺が行われた。そうした混乱に乗じて官憲による大杉栄らの虐殺（甘粕事件）、労働運動の指導者たちの虐殺（亀戸事件）も起こる。

この在日朝鮮人に対する震災テロリズムから伺えるのは、戦前の探偵小説はそれに応答できず、個人・大衆・権力との関係を突き詰めることなく、不可解で猟奇的な犯人の内面にすべてを収斂させてしまったということだ。大衆が抱く不合理や無意識への不安を西欧の探偵小説は、名探偵による合理性の勝利によって想像的に解消してみせたのに対して、日本では、大衆の不安が探偵小説に回収されずに、「群衆の人」（エドガー・アラソン・ポー）と化した大衆が権力の手先となって、個人の痕跡を消したまま犯行に及んだ。ここでは、大量殺人事件が現実の世界で演じられ、探偵不在のまま解決もされなかった⁶。

同じく、自白中心主義の戦前において、本格探偵小説が成立しないことが、以下のように語られる。

「密室殺人が起きたらどうするのか。犯人がどうやって密室を作ったか、それがわかるまで容疑者の決めようがないだろう」

すると爺さんは笑いながらいってのけた。

「そりゃあべこべだ。まず怪しい奴を捕まえる。それから脅したりすかしたりして、自白させる。密室破りの方法など犯人に聞けばすぐわかるじゃないかね」

「でもその人が無実なら、密室の謎はわからないだろう」

「わからなくても構わないのさ、そいつ以外に怪しい者がいなければ、ちゃんと起訴に持ち込めるんだ、この国では」。

（中略）

一兵は落胆した。これでは舶来の小説に出てくる密室殺人なんて日本に存在するはずがない。探偵小説がお化け屋敷のヒュードロドロでしかないのは当たり前か……。

「探偵小説がお化け屋敷」というのは、松本清張の横溝正史らの本格探偵小説批判を踏まえたものだろう。「探偵小説を「お化屋敷」の掛小屋からアリゾムの外に出したかった」⁷清張は、名探偵を排除し素人探偵を登場させ、犯人の犯行の動機やその社会的背景を描くことを主眼にして、社会派ミステリを

量産した。

シリーズ二作目においては、名探偵の那珂一兵は、戦前に金田一耕助の助手であったというエピソードが語られてもいるが、辻が少年期に耽溺した乱歩や横溝の〈探偵小説〉へのオマージュと同時に、戦後的な価値観に基づいた〈推理小説〉が模索されていた。

その意味で本作は、変格探偵小説全盛期及び敵性文学としての探偵小説受難の時代を背景に、謎解きを旨としながら、犯人の動機(社会性)をも描いた〈社会派本格探偵小説〉なのである。

『たかが殺人じゃないか 昭和24年の推理小説』への展開
——〈探偵小説が推理小説に脱皮する時代〉

昭和二四(一九四九)年、ミステリ作家を目指しているカツ井こと風早勝利は、名古屋市内の新制高校三年生になった。旧制中学卒業後の、たった一年だけの男女共学の高校生活。「日本の民主化」を進める進駐軍によって学制が改革され、男女共学が始まった。戦前とまるで違う価値観を押しつけられた思春期の生徒たちの戸惑いや怒りが描かれる。

そんな中、顧問の別宮操の勧めで勝利たち東名学園推理小説研究会は、映画研究会と合同で奥三河の湯谷温泉へ、操と男女

生徒五名で一泊旅行を計画する。修学旅行代わりの小旅行だった。そこで密室殺人事件に巻き込まれる。さらに夏休み最終日の夜、キティ台風が襲来する中、旧日本軍の廃墟で首切り殺人事件が起きる。

第一の殺人現場は、勝利たちが泊まった湯谷温泉からやや離れた山間に建てられたモデルハウス。操がドアを蹴破つて中を確かめたところ、はたして遺体が見つかる。被害者は、徳永信太郎、六八歳。全国的に名の知れた地元の名士で、古武士のような老人。遺体の頭部には挫傷があり、木材のようなもので殴られたものと思われる。二つあるモデルハウスの出入り口は内側から施錠されるなどして、犯人の脱出経路が不明。主人公たち東名学園の生徒たちは、その第一発見者となる。状況的に生徒たちと操にはアリバイがあり、警察からも深くは疑われない。明らかに怪しいのは、上海から帰国した編入生の咲原鏡子である。大人たちが彼女に接する態度にはなにか含みがあり、鏡子がなんらかの秘密を抱えていることが序盤から示唆されている。

闇市で勝利は鏡子に偶然出会い、その秘密を知る。鏡子は、貧困の中、病床にある父のために、進駐軍相手の「パン助」をしていたのであった。今は、日系二世の陸軍少佐のハヤト・ロビンソンの「オンリー」となっていた。

松本清張の女性像との比較

真犯人ではなかったものの、容疑者の過去が、パンパンであつたという設定は、清張の『ゼロの焦点』（一九五九年）と共通する。『ゼロの焦点』では、女性の性的身体への過剰な記号化が行われ、敗戦のトラウマ体験が女性への性暴力に集約されている。ここに、横溝正史の『本陣殺人事件』（一九四六年）も追加してもいいだろう。犯人の新婦殺害の動機は、新婚初夜に新婦が処女ではなかったということに気づいたからだつた。

占領下のパンパンと処女をめぐるエピソードはどちらも、女性を受動的な立場にとどめ置いたまま、男性主体による女性の性の管理をめぐる記号体系によつて形作られている。

同じ、記号体系に基づいた清張の短編に、「赤いくじ」（一九五五年）がある。この作品は、敗戦直後の朝鮮半島において、アメリカ軍の進駐を前に、軍上層部が日本人会の婦人たちをくじで選別して、慰安婦として差し出し、姑息にも生き延びようとする悲喜劇を描いたものである。進駐してきた米軍は、慰安婦を要求しなかったものの、くじを引いた夫人たちは、引揚の列車内で偏見と差別、好奇的となつた。美貌の塚西夫人もその一人であつた。末森軍医は今まで手に届かない存在と思われた塚西夫人が赤いくじを引いたため、夫人が急に自分の手に届

く範囲になつたと錯覚する。嫉妬に狂つたライバルの楠田参謀長と争いになり、末森は楠田を射殺。その後、末森も銃で自害した。

このような敗戦によつて「勝者の欲望」の模倣にも失敗して損傷した男性主体の回復を目指そうとしたのが、清張の『球形の荒野』（一九六二年）といえるかもしれない。第二次大戦末期、日本を破滅の淵から救うため、祖国、妻子を捨てた男が、一七年ぶりに帰郷したことから発生する連続殺人事件である。物語は、死亡したとされる元外交官の野上顕一郎の姪が奈良のお寺を参拝したとき、記帳簿に野上に似た筆跡を発見したことから始まる。野上の娘・久美子のフィアンセで新聞記者の添田が、興味を持ち調査を進めるうちに、野上と関わりを持つ人物が次々殺される。

『球形の荒野』は、『ゼロの焦点』と同様に戦争による犠牲者を登場させながら、パンパンとしての過去を封印し、敗戦による屈辱を甘受しなければならぬ佐知子に対して、失敗したとはいえ、野上の敗戦工作は、残された妻子たちのための戦後の平和をもたらす、ヒロイックな自己犠牲として称揚されている。真相にたどり着いた添田は、野上の意を汲んで、野上の生存を妻子に伝えることなく、親子の再会を演出する。女性たちは、庇護の名の下に真相から遠ざけられる。

その意味で、本作の真犯人が別宮操という女性教師であるというのは、その対照性が際立つ。生徒に慕われている武道全般の達人で、尾張徳川家代々の別式女であり、貴人を護衛する男装の女性である。操は、終戦後、変節した男たちを追い詰めていく。

操は別の場所で殺害した徳永を、屋根から家の中に放り込んだ。犯人は遺体発見時に「玄関に履物があつた」と用意していた靴を見せることで、徳永が家まで歩いてきたように見せかけてもいた。上方の遊園地跡から滑り台の残骸を滑車にして遺体を運んだトリックであつた。

第二の殺人現場は、東名学園に併設されたコンクリート三階建ての建物。元は軍の施設であつたが、空襲で燃やされ、床には地下まで貫通した不発弾による穴が空いていた。勝利たちはそこで文化祭で発表する映画を撮影していた。

勝利たちは二階の床に置かれた生首を発見する。被害者は市会議員の郡司英輔、五〇歳。一人目の被害者である徳永とも交流のある人物であつた。どう考えても勝利たち六人の中の誰かが犯人なのだが、遺体を解体する時間が誰にもなかった。

犯人がわざわざ遺体をバラバラにしたのは、「そんな時間はなかった」というアリバイをつくるためであつた。そして、実際に犯人には遺体を解体する時間はなかった。勝利たちが目撃

した生首は、このときはまだ切断されていなかった。生首が発見されたのは二階の床。勝利が生首だと思つたものは、不発弾によつてできた穴を通して二階に頭だけを見せている遺体であり、一階にはまだ首とつながつた胴体があつた。

生首発見後、勝利たちは、守衛を呼ぶため守衛室に向かう。

そして、現場には見張りとして犯人だけが残る。勝利たちが戻ってくるまでの間に犯人が遺体を解体したのだつた。この事件の犯人も、遺体の解体ができる刀剣の達人の操であつた。

こうして、二つの事件の犯人とその犯行方法を論理的に謎解きできる本格ミステリとなつているのだが、犯行動機は推理することができない。

読者への質問状

- ・密室殺人はいかにして行われたか？
- ・解体殺人はいかにして行われたか？

伏線をたどつて解答できた方でも、残念ながら動機まで推測するのは無理があります。まだ物語は途中なのですから。

従いまして、トリックを解明し犯人を指摘できたあな

たも、解明の努力を放棄したあなたも、つづけてこの後を読んでくださるようお願いいたします。

このように、途中、作者による「読者への挑戦状」ならぬ「読者への質問状」が挿入される。本作品においては、フーダニット (Who done it)、ハウダニット (How done it) ではなく、ホワイダニット (Why done it) が重点となる。

戦争と震災——新たな大量死の経験と隠蔽

物語は、終戦日にまでさかのぼる。その日、後に被害者となる徳永と郡司は墜落機に搭乗していた米兵の生き残りを探して、山狩りをしてた。終戦を告げる玉音放送があったからといって、にわかには信じることも受け入れることもできない頑固な二人は、ついに負傷した米兵の生き残りを発見後、容赦なく日本刀で斬り捨てる。二人は、秘密裏のうちに米兵の遺体を焼却した。

その数日前、負傷した米兵を最初に発見したのは地元の少女であった。少女は傷ついた米兵を見捨てることができず、打ち捨てられた小屋にかくまうことにしたのだが、結局、その小屋は二人に見つかってしまう。少女はもう戦争は終わったのだからと二人を止めようとしたが、逆上した郡司に少女は殺される。

郡司は、手近な井戸に少女の遺体を隠したのであった。

亡くなった少女の名前は野々村節。かつての鏡子の親友であり、操にとっては母親違いの妹にあたる人物であった。節の祖母の日記を持ち去り、操は行方不明になった妹の身に何が起こったのかを調べていた。やがて、操は終戦の日に何が起こったのかに気づくのであった。

第一の事件が起こった日の早朝、操は真実を問ひ質すため徳永を山中の博物館に呼び出した。徳永は、ついに犯行を認め、次のように開き直る。

「人殺しだと？ なにをいうか。きゃつらは日本人を殺した！ 本所深川一帯で一夜のうちに一〇万の命が奪われたぞ。広島を見よ長崎を見よ、大東亜を軍靴の下に踏みつぶした、それが白人の歴史である！」

(中略)

「殺したのはたつたふたりだ、一〇万一〇〇万の命をやとりする戦争を思えば児童に等しい。さよう……たかが殺人ではないか！」

本作品の表題は、この徳永の発言から取られたものであった。戦争という大量殺戮の時代においては、固有の犯行動機に基づ

く固有の殺人は隠蔽されること、つまりは、匿名の死に対して個別の死を描く本格探偵小説は成立しえないことを逆説的に語る。

『荒地』派の詩人・田村隆一は、戦後、早川書房に入社し、アガサ・クリスティの翻訳権を取得し翻訳したり、ハヤカワ・ポケット・ミステリの企画・編集に携わったりするなど、戦後のミステリ普及に多大な貢献をした。その田村は、「戦争による“人殺し”ですが、あれは探偵小説になりません。アウシュビッツとか原爆による大量殺戮には、個人の犯罪動機が稀薄でしよ。組織による虐殺ですから、犯行者の罪悪感がない。単に戦略遂行の事務能力だけしか問題にならない。個人が個人を殺すのでなければ“事件”の魅力がないのです。」⁹と述べている。ミステリが描く殺人事件には、そのネガとして戦争による大量死・匿名死の経験がある。ミステリが対象にするのは、大量殺戮ではなく、「たかが殺人」なのである。

探偵の一兵は、「密室の謎解きが必要なら、(中略)民主警察の今では、謎が解決できなくては犯人を収監できないんだ」と述べ、「探偵小説が推理小説に脱皮する時代なんだ」と戦前的な〈探偵小説〉に対して戦後的な〈推理小説〉を提唱する。

このように、自白偏重の科学的な捜査の不在、大量死による死者の匿名化などミステリの成立要件を満たすことの出来な

かった戦時下の言説空間が批判されているわけだが、他方、大量死の経験が推理に貢献するエピソードも語られている。

一兵による推理の過程で、次のように死の認定の確定性が問われる。

「念のために確認するよ。……きみが目撃したときの郡司議員は確かに死んでいたね?」

(中略)

「間違いありません。あの顔色は、絶対に死んでいました」

しばしば空襲に遭遇した少年は、絶命直後の人体を目撃したことがある。焼夷弾攻撃に晒された全員が消炭状態になるのではない。恐怖の形相を浮かべながら一見無傷に見える遺体もあった。煙に巻かれて窒息したらしいが、それでも魂のない無機物だと直感できた。

近代戦に銃後も前線もないことを否応なく知らされ、知ったときにはもう命を吹き消されているのが、昭和二〇年三月一〇日以降の無差別爆撃であった。

血の吹き出るような体験のおかげで、今も断言できるのだ。

「死んでいました」

一兵は淡々と勝利の返答を受け入れた。

前作においては、科学的な捜査が蔑ろにされた戦前にしか成立しないトリックが用いられたわけだが、ここでは、勝利の戦時下の大量死の経験による非科学的な死の認定が、むしろ「真実」として提示されている。死の認定をめぐる科学的・医学的捜査が不十分であった戦時下においては、逆に登場人物の空襲による大量死の経験が、正しく真相に導くことをアイロニカルに語る。

また、戦争と震災との関係にも言及されていた。震災という戦時下、戦争直後におけるもう一つの大量死・匿名死の経験は、災害自体が隠蔽され、無いことにされてしまった。戦争は、死者を匿名化するだけではなく、別の大量死の経験を隠蔽してしまう。

だが四年前にこの地方を襲った三河地震の話題なら格別だ。鏡子を除いて誰もが、三年連続したこの地方の大地震の恐怖が身に沁みていた。

敗戦の前年一二月七日に発生した東南海地震がその第一号だ、関東大震災を凌ぐマグニチュード八・〇で、零戦や新司偵を生産する名古屋に壊滅的な打撃を与えた。

軍が震災の情報を秘匿したため大半の日本人は知らなかったが、アメリカは地震計でちゃんとキャッチしていた。

翌二〇年一月一三日の直下型地震が三河地震だ。深夜のせいもあつて東南海地震を凌ぐ人的被害を出したらしい。らしいというのは戦局の退勢に伴って行政がすべてに沈黙を続けたから、山襲に埋もれた集落が全滅しても救助は一切なく、したがって被害の調査もされなかったためだ。

さらに二一年には南海地震が発生する。戦争は終わっていたが、紙不足で新聞もろくに出版せず、勝利も新宮市全滅の写真を見られたのがせいぜいで、高知の壊滅については無知だった。まして戦時下の三河地震ときたら、布団ごと背中を突き上げてきた揺れ以外なにも知らない。「地震の夜に海を見たらピカピカ青白く光ったそうよ。岩礁同士がぶつかり合ったのね。震源近くの三ヶ根山の上空が光ったという噂を聞いたけど、ラジオも知らん顔だったって」

津波の被害をうけた三重県が現地調査に派遣した職員は、スパイの疑いで憲兵に検束される始末であったという。

「それが戦争というもんだ」

東南海地震、三河地震、南海地震と一九四四年から三年連続の地震による大量死の経験は、戦争による大量死の経験と等価となるどころか、後者によって隠蔽される。辻の戦争経験は、戦時下の言説空間とミステリというジャンルの歪みを顕在化させる。

ところで、妹を殺害した二人の変節漢への復讐を果たした操の逮捕によって二つの不可能殺人事件は幕を閉じるのだが、一兵に謎を解かせたのは他ならぬ操自身であった。つまり、探偵の謎解きは操にとって遠回しな自白だったわけだ。操が罪を自白した理由のひとつは、鏡子を無事に渡米させるためでもあった。事件が解決しないと関係者として日本から出られない。一方でハヤトの祖母が危篤で、急いで渡米する必要があったのだ。鏡子にとっては、パンパンの過去は、『ゼロの焦点』のような敗戦の屈辱でもトラウマ体験でもなかったのである。

また、操の犯行は、異母妹を殺害した者たちへの復讐劇を通して、戦争責任の問題を追及する社会性も帯びていた。その意味で、清張流の社会派ミステリでもあるわけだが、本作は、さらに、本格ミステリのコードをパロディ的に侵犯しながら、ミステリを自己生成するメタフィクション的構造も備えていた。

メタフィクション的構造

警察に逮捕された操は、現場検証中に人命を助けて死ぬ。増水した川に落ちた人を助けたが、自身には手錠がかかっていたからだ。生徒たちが悲しみに暮れる中、勝利は操にかけられたこの一連の事件を作品にするのだよという、最後の言葉を思い出す。つまり、最初からこの物語は勝利が執筆した小説だったというメタフィクションでもあった。作者の辻真先と勝利が二重写しになる仕掛けである。

「トーストだったわね。本格ミステリはどうでもいい話が長々つづいて、終わりになるまで犯人がわからない、民主的じゃないといったのは。だから意地になって書いてんですって」

「へえ。どんな具合に書いたんだ」

「最初の一ページで、すぐ犯人を紹介する!」

級長の宣言に、トーストと姫が吹き出し白い息を吐いた。

「事件も始まらないのに、犯人が出せるかよ」

「うまくいったらお慰みですわね」

テーブルの上でカリカリと音をたてていた勝利が、そ

の手を止めて声をかけた。

「お待たせ！ 最後まで書いたから、もういいぞ。こいつ

を印刷する間に、きみたちは一ページから読んでくれ！」

いわれるまで律儀に待つていた三人が顔を寄せてきた。

そして読みはじめた。

最後に真相が明かされるという本格ミステリの暗黙の了解を「民主的じゃない」と戦後的な価値観に重ねて批判したうえで、戦後的な価値観にふさわしいミステリを生成させる。この引用に続く結末の文章は、そのまま小説の冒頭と同じである。会話の中にあつたように、読者ははじめから犯人を知らされていた、ということになる。「序章 推理小説を書きだした」と「終章 そして、推理小説が脱稿した」は、次のように円環構造となつて閉じられ、読者は、再帰的に冒頭部に連れ戻される。

「犯人はお前だ！」

鉄筆の先端で、廊下に面した戸を指したとたん。

タイミングよくその戸が開いたから、驚いた。部屋にはいろいろとしていた別宮操先生も、目をまるくして立っている。

「へエ、私が犯人？」

おわりに——娯楽と批評のあいだ

『馬鹿みたいな話！ 昭和36年のミステリ』は、昭和ミステリシリーズの第三弾である。このシリーズには、辻の自伝的なエピソードが盛り込まれているが、とりわけ、本作は黎明期のテレビの制作現場で働いていた辻の体験が色濃く反映されている。前作で推理小説研究会のメンバーだった風早勝利の脚本で、同級生の大杉日出夫がプロデューサー、二人とは旧知の那珂一兵が美術スタッフを務めた中央放送協会のミステリ・ドラマが生放送の本番を迎えるまでのプロセスを、実在の歌手、俳優、番組名を挙げながら詳細に描かれていく。そして、その生放送中のスタジオで主演女優が刺殺されるという、衆人環視の中の密室殺人事件が起こる。昔のテレビ業界の裏話にも見える、こうした当時のテレビ番組制作の実態の記述が、読者に不可能犯罪と印象づけるための本格ミステリ成立の要件となっている。昭和三六（一九六二）年という高度経済成長期の好景気により誰もが戦争の悲劇を忘れつつあった時代でありながら、前二作ほどではないにしても事件の背後に戦争の影をさりげなく落としている。夫が戦争末期の銀座の大空襲で生死不明となった妻、その妻が疎開先で出会った男と二人の間にできた娘の存在、まだ墮胎罪や姦通罪が生きていた戦争直後の混乱期の状況など

が、この事件の遠因となっていた。

本シリーズは、声高に、あるいは教条的に戦争を批判することはない。辻の個人的な戦争体験に基づいたエピソードを効果的に盛り込んだ青春小説でもあり、戦前の〈探偵小説〉から戦後の〈推理小説〉へと至る日本のミステリの屈折した歴史性——戦争がミステリというジャンルに与えたねじれ——をも内包した、エンターテインメントとしてのミステリ創造に関わる本格ミステリでもあったのだ。

注

- 1 拙稿「読者Ⅱ犯人の系譜——中井英夫から深水黎一郎まで」（押野武志他編著『日本探偵小説を知る』（二〇一八年、北海道出版会）参照。
- 2 名古屋商工会議所HP (<https://history.nagoya-cci.or.jp/shouwashoki/h12.html>) 参照。
- 3 「昭和ミステリ あとがき」（『馬鹿みたいな話！ 昭和36年のミステリ』（二〇二二年、東京創元社）。
- 4 本文の引用は、『江戸川乱歩全集』（二〇〇四年、光文社）に拠った。
- 5 本文の引用は、文庫版『深夜の博覧会 昭和12年の探偵小説』（二〇二二年、東京創元社）に拠った。以下同様。
- 6 拙稿「危機の時代のミステリ」（『新薩摩学』一五、二〇二〇年八月）

参照。

- 7 「日本の推理小説」（『黒い手帖』一九七四年、中央公論社）。
- 8 本文の引用は、『たかが殺人じゃないか 昭和24年の推理小説』（二〇二〇年、東京創元社）に拠った。以下同様。
- 9 『田村隆一ミステリーの料理事典』（一九八四年、三省堂）。『荒地』派とミステリとの関連性を論じ、ミステリを戦後文学と位置づけた拙稿「ミステリと戦後詩」（『武蔵野文学館紀要』六、二〇一六年三月）参照。